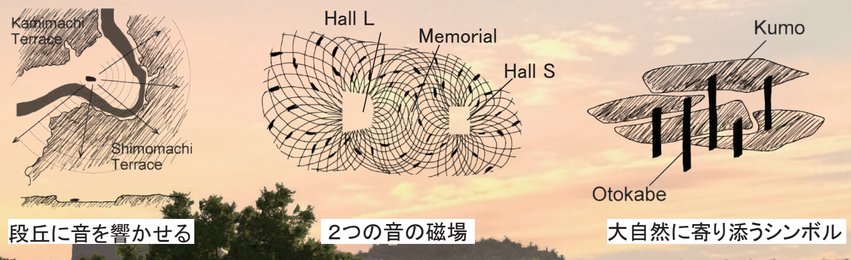
音の雲に包まれ、環境へひろがる
- Otokabe と Kumo の建築 -

大自然を畏れ寄り添って生きる、という態度を建築にすること。災害には最善の備えをし、安心感や人々の連帯をはぐくむ場所をつくること。私たちは Otokabe（音壁）と Kumo（雲）による建築によって、震災メモリアルにふさわしい人々のための場所を提案します。
「音」が持っている、人々をつつむように拡がる性質。Otokabe とは、それを生かすために散在させる、堅固な壁柱です。それは、大ホールと小ホールを極とした音の磁場のような力線に沿って配されます。Otokabe によって、やわらかく包まれつつも開かれたホールや、様々な音の圏域が生まれます。Otokabe はまた、多彩に展開するメモリアル展示のベースにもなります。そして、永くこの場所を守り続ける耐震壁でもあります。Kumo は Otokabe の間をたなびくようにつなぎ人々の連帯を深めます。Kumo の上では、ラウンジやホワイエ、さまざまな市民活動や展示が展開します。Kumo の中には練習室や楽屋などがあり、雲の上とつながります。Otokabe と Kumo によって、音の雲に包まれ、環境へひろがる、人々のためのメモリアルが生まれるでしょう。



段丘に音を響かせる　　2つの音の磁場　　大自然に寄り添うシンボル

1. 大自然と共存した人々の集まりの場をつくります

1-1. 広瀬川や青葉山の風景と響き合うたなびく雲のような外観

大きな自然景観の一部のような建築を提案します。ゆるやかにたなびく Kumo は、全体を柔らかく分節しながら、ランドスケープと融合した外観をつくり出します。

1-2. 仙台の丘に拡がる人々のための場所

ホールを含む内部やテラスから広瀬川がつくり出した仙台の段丘が見えます。大きな環境の連続性を感じながら、さまざまな人々と集まれるような場所をつくります。

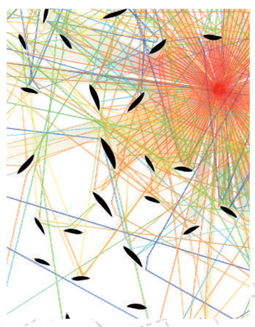
1-3. 自然の恵みを生かしたエネルギーコンシャスな建築

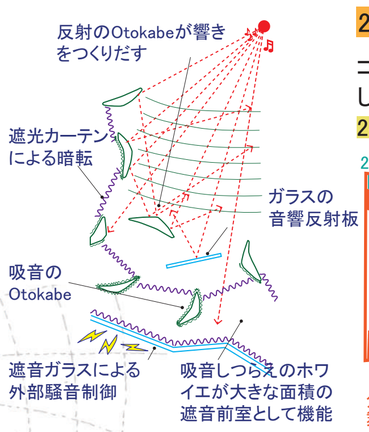
自然エネルギーを最大活用した建築とします。仙台の豊富な地下水の活用、卓越風の取り入れによる屋内広場の換気、ナイトパージによる空調負荷の低減、自然光の活用や太陽光発電など、可能な限り自然と寄り添う計画とします。

2. 音につつまれた、安心感のある場所をつくります

2-1. 囲まずに包む、開いたホール

これまでの音楽ホールは、強固な壁で囲い込み外界を遮断することで高度な音響性能を追求してきました。が、震災を通じて自然を支配しようとする思想の限界を知り、芸術家の復興活動の力を知った今、震災メモリアル拠点と共存する新しいホールは、もう少し、人々を招き入れ環境に寄り添う場所を目指しました。ホールを包み込む多層の Otokabe、それらを結ぶガラス壁・遮光・吸音カーテンが、演目に応じて外光や外部騒音を柔らかく制御します。





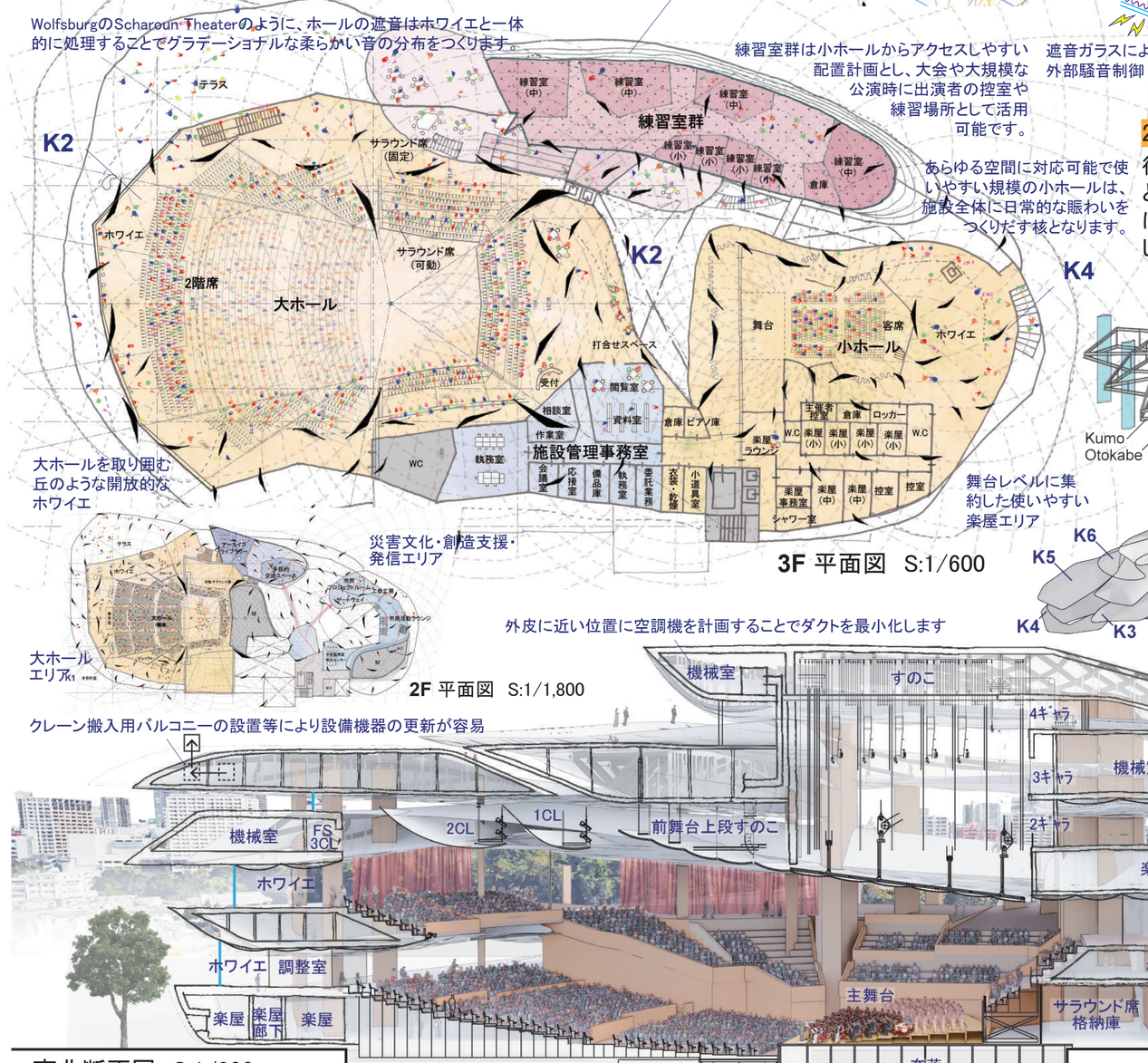
広瀬川に面した眺めのいいテラスに出て、開演前や休憩時にくつろぐことができます。

大ホールの利用に支障がない場合にはホワイエを開放し、自由な出入りを可能とします。

WolfsburgのScharoun Theaterのように、ホールの遮音はホワイエと一体的に処理することでグラデーショナルな柔らかい音の分布をつくります。

練習室群は小ホールからアクセスしやすい配置計画とし、大会や大規模な公演時に出演者の控室や練習場所として活用可能です。

あらゆる空間に対応可能で使いやすい規模の小ホールは、施設全体に日常的な賑わいをつくりだす核となります。



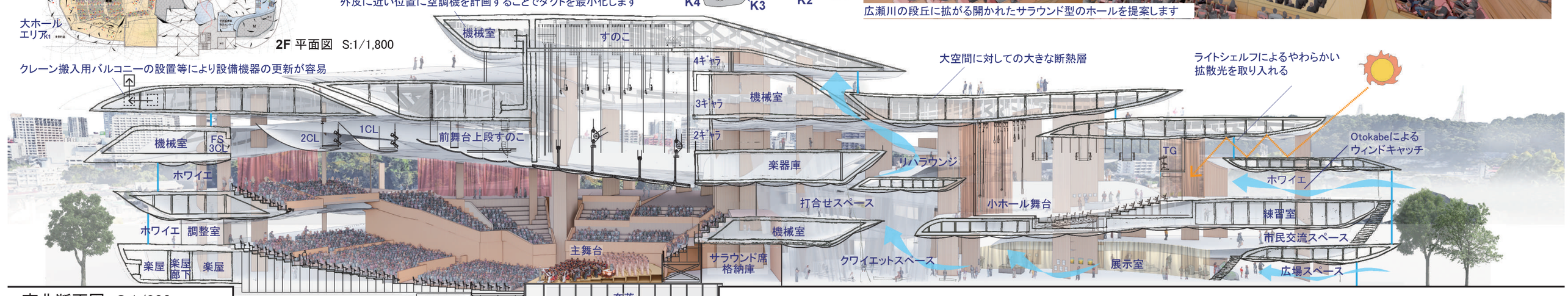
大ホールを取り囲む丘のような開放的なホワイエ

舞台レベルに集約した使いやすい楽屋エリア

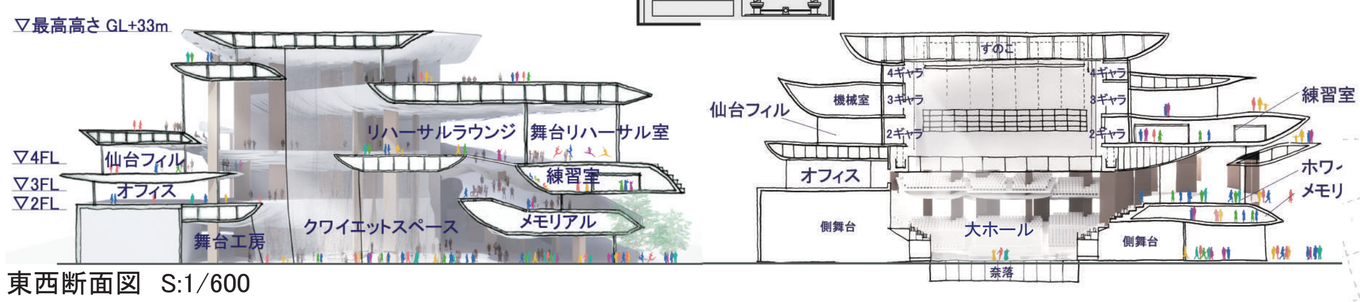
3F 平面図　S:1/600

災害文化・創造支援・発信エリア

2F 平面図　S:1/1,800



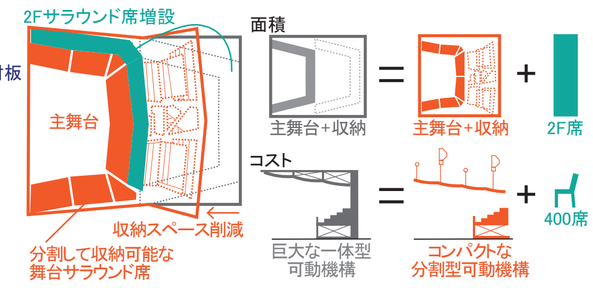
南北断面図　S:1/300



東西断面図　S:1/600

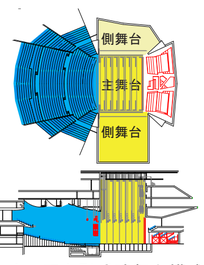
2-2. ダイナミックなサラウンド席をつくり出すシンプルなモードチェンジ

コンサート形式からプロセニアム形式へのモードチェンジは通常、非常に大掛かりな可動機構を必要とします。本案はこれをわずかな可動部と余剰の固定席に読み替えることで、面積やコストの増なく、2400 席がステージを取り囲む音楽ホールを可能にしています。



可動機構収納スペースの削減分を 2F サラウンド席に分配することで、床面積を維持したまま座席数を増やすことが可能。

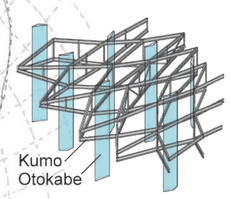
分割したコンパクトな可動機構にすることで、コストを抑えメンテナンスを容易にする。コストの差分で 2F サイド席 400 席を増設可能。



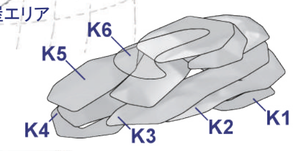
プロセニアム形式時舞台構成

2-3. 音の広がりと耐震性を同時につくる構造

従来の箱型の構造ではなく、同等以上の耐久性・耐震性を持つ壁柱 =Otokabe を、音の広がりの軸上に分散配置する構造とし、音楽ホールと外部が一体となる“開かれたホール”を実現します。様々な向きに配置された長寿命化コンクリート壁柱は、各フロアを構成する鉄骨造の Kumo を支持し、耐震要素として機能します。Kumo は鉄骨構造とし、シンプルな骨組みとします。



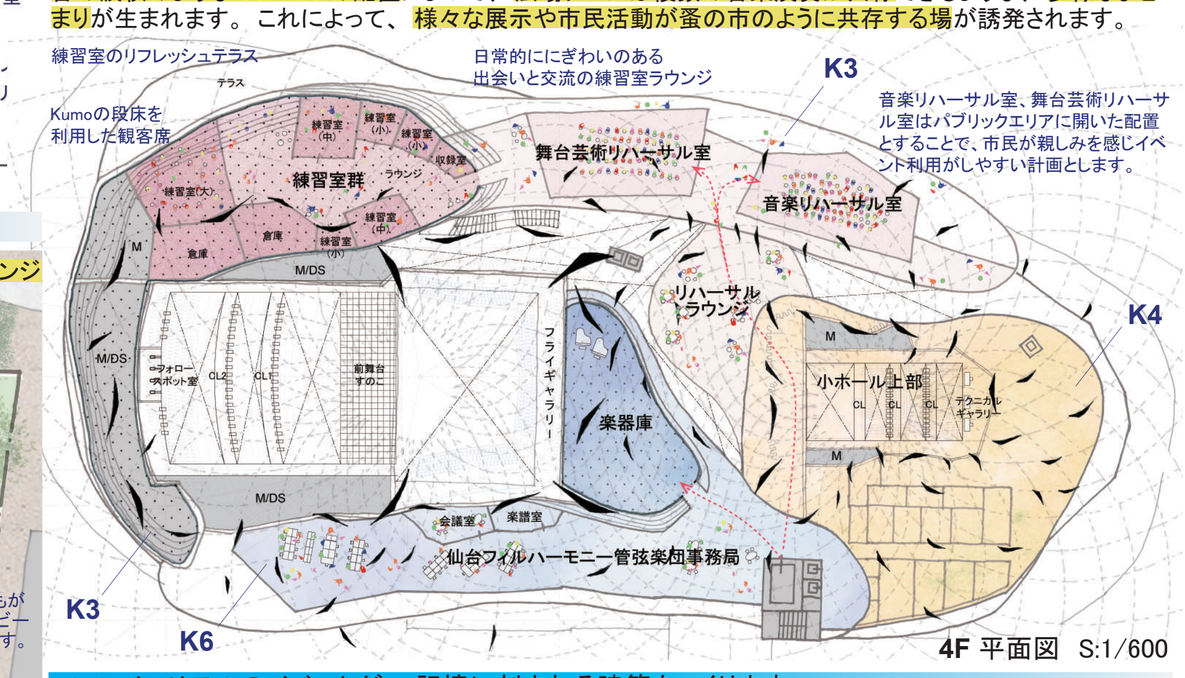
広瀬川の段丘に拡がる開かれたサラウンド型のホールを提案します



3. 震災の記憶を確実に伝え、人々を結びつけます

3-1. Otokabe によって、様々な音に包まれた、展示と交流の場が生まれます

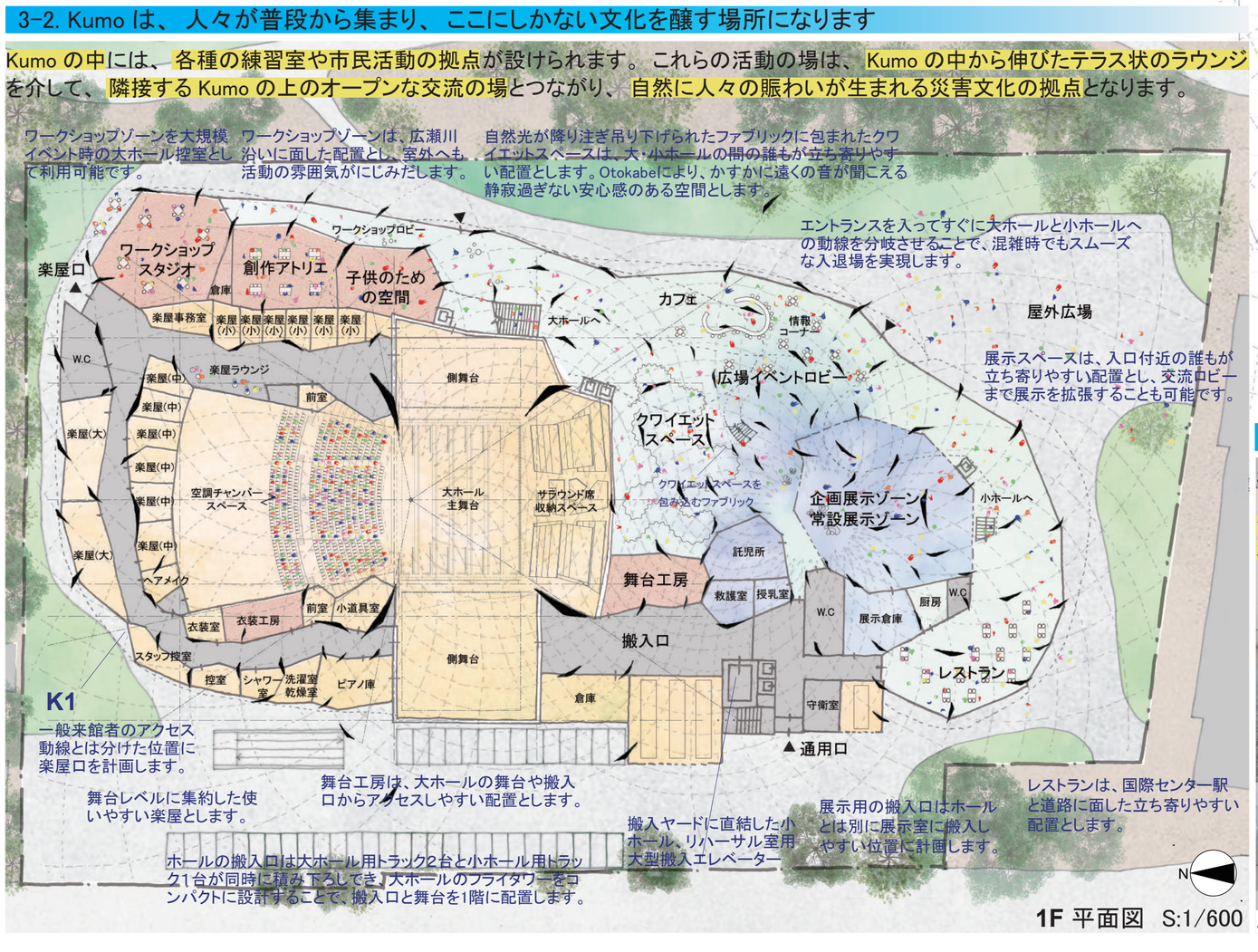
音の波紋のような Otokabe の配置によって、広場ゾーンは複数の音楽演奏が共存できるような、多様なまとまりが生まれます。これによって、様々な展示や市民活動が蚤の市のように共存する場が誘発されます。



4F 平面図　S:1/600

3-2. Kumo は、人々が普段から集まり、ここにしかない文化を醸す場所になります

Kumo の中には、各種の練習室や市民活動の拠点が設けられます。これらの活動の場は、Kumo の中から伸びたテラス状のラウンジを介して、隣接する Kumo の上のオープンな交流の場とつながり、自然に人々の賑わいが生まれる災害文化の拠点となります。



1F 平面図　S:1/600

3-3. メモリアルのイベントが、記憶に刻まれる建築をつくります

3.11 のメモリアルの日には、可能な限りたくさんの人々がこの場所や河原に集まるイベントが開催できるような、開かれた建築をつくります。大ホールでの演奏が館内全体にひろがるようなイベントや、大ホール小ホールをつなげて使うことも可能です。震災を知らない世代にも、記憶に刻まれる出来事を通して大切なことを伝えられる場所にします。

広場エリアおよび中心部震災メモリアル拠点では、新たな震災文化に向けた様々な対話が行われる